

入選

中島 碧惟(なかじま あおい) 第三小 2年生

作品名: 知りたい気もち

図書: ニュートン

しんがたコロナウイルスかんせんしょうのかく大ぼうしのため、今年の春、学校が休校になった。ぼくががんばっているしょうぎの大会もなくなった。大さかとしておかのおじいちゃん、おばあちゃんにも会えない。そんな時に、お母さんがニュートンのことを話してくれた。

「むかしペストっていうびょう気が大りゅう行した時、ニュートンの大学もお休みになったんだって。その時にニュートンはにわで木からおちるリンゴを見て『リンゴは木からおちるのに、月は地きゅうにおちてこないで回りつづけるのはなぜだろう。』って考えたらしいよ。それが万ゆう引力のほうそくのはっ見につながったんだって。」

ぼくはニュートンの本を読むことにした。

一六四二年、ニュートンはイギリスで生まれた。ニュートンは生活していて気になったことをそのままにしておかなかった。たとえばぼくと同じ二年生の時に、自分一人で考えて水時計を作った。水時計はニュートンが生まれる二千年も前からヨーロッパやエジプトでつかわれていたけれど、ニュートンはそんなことぜんぜん知らないで作り上げた。だれかに答えを聞かないで、自分だけで考えて作り上げるなんてすごいなと思った。

たこあげ大会の時も、たこにあたるかぜの角ど、たこの大きさ、かぜの強さのかんけいをけんきゅうして、いろいろなたこを作った。大会の日、その日のかぜの強さを考えて中ぐらいの長四角形のたこをえらびゆうしょうした。大会がおわった後も、たこはどのくらいのおもさのものもち上げられるのかけんきゅうした。ニュートンにとって、ゆうしょうよりも「知りたい」という気もちのほうが強かったんだろうな。

ニュートンはリンゴの木の下で、ただぼーっとしていたのではないと思う。子どもころから自ぜんにきょうみをもって、しらべたりたしかめたりしていたから、リンゴがおちたことを万ゆう引力のほうそくのヒントにできたのだと思う。

ぼくは友だちという時間も、一人でいる時間も大すきだ。休みの間、ニュートンのようにすきなことをたくさんやった。にわにあなをほる、食虫しょくぶつのかんさつ、いっぱい本を読む。それに、にが手だったさか上がりもれんしゅうして、できるようになった。

それから、ニュートンみたいになぜ・どうしてを考えることや「知りたい」という気持ちを大じにしてみた。しょうぎでかつとうれしくて、ふりかえらない。まけるとくやしくて、もう考えたくない。これをなんとかしないと強くなれないと思う。かちまけだけならジャンケンでいいと、プロキシの羽生さんも言ってたな。大じなことは気になったことをそのままにしないこと、おわったあとも見かえすことなんだ。ニュートン！がんばるよ！